

「おはよう」

マタイによる福音書 28：1-10

週の初めの日の朝早く、二人の女性たちはイエスさまの墓に行きました。この女性たちは何をしに墓に行ったのでしょうか。マルコ福音書には、女性たちがイエスさまの遺体に香油を塗るために行ったことが記されています。しかしマタイは「墓を見に行った」とだけ記します。しかもこの「見る」という言葉は、「じっと見つめる」というような強い言葉です。つまり、女性たちは「墓を見つめるために行った」というのです。女性たちは、イエスさまの十字架と復活の予告を信じてイエスさまの墓に来ていたわけではありませんでした。墓に行けば、何かまだその人と自分がつながっているような、そんな思いを抱いて墓に行ったのでしょうか。

その女性たちに、イエスさまの墓が空であるという事実が告げられます。この時、女性たちは常識では考えられない恐ろしい出来事に遭遇します。それは同時に居合わせた番兵たちが「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のように」なるほどでした。しかし、そのことを通して、この女性たちは、絶望の極みにあったところから、再び立ち上がることの出来る喜びに気づかされていくのです。

天使は、「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない」と告げます。

イエスさまが葬られた墓を見つめて嘆き悲しんでいる女性たちの姿。それはイエスさまに対する深い愛の現れではありますが、その愛が深ければ深いほど、絶望も大きいものでした。しかし、主イエスの復活は、その絶望はお門違いだと告げるのです。この時、女性たちが見つめていたことは、イエスさまが、その死によって過ぎ去った思い出の中の存在になったということです。しかし、天使は言います。「それは見つめるところが違う、あなたがたが見つめるべきものは墓ではない。そこに主イエスはおられないのだ」と。そう言って、女性たちに空の墓を見せるのです。墓石がわきへ転がされたのは、復活された主イエスを墓から出すためではありません。そうではなく、復活された主イエスがすでに墓にいないことを彼女たちに、また弟子たちに見せるためでした。そして、二人の女性は、確かに死んで葬られたイエスさまが、もう墓の中にはおられないことを知らされたのです。

何もかもが、自分の頭の中で処理出来る分をはるかに超えることばかりでした。この時の女性たちが、イエスさまが復活されたことをすぐに理解したとは到底思えません。一体何が起きたのか分からないまま、女性たちはただただ恐れたことでしょう。けれども同時に、その恐れを突き抜けてやって来る光をも感じたのではないのでしょうか。それが「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び」（8節）ということだったのです。また、これは私たちの信仰の姿とも言えるのではないのでしょうか。私たちには理解しきれない出来事、この先何が起こるのか分からない不安、さまざまな恐れを抱えています。けれども、そのような中で私たちは、イエス・キリストにある喜びを信じるものへと変えられていくのです。

そんな恐れ半分、喜び半分の女性たちが、確かな喜びに変えられた出来事。それが復活の主イエス・キリストとの出会いです。

復活された主イエスは、女性たちに「おはよう」と声をかけられました。この「おはよう」と訳されている言葉は、原典のギリシア語では「カイロー」という語で、元の意味は「喜びなさい」という意味です。この言葉は、日常の挨拶の言葉として用いられていました。ですから、朝であれば「おはよう」、夜であれば「こんばんは」等と訳されています。また、他にも「ようこそ」とか「おめでとう」、あるいは「万歳」という意味でも使われています。

実は、この言葉は、イエスさまの十字架と復活の場面で、このほかに2回使われています。一つは、ユダがイエスさまを裏切って祭司長たちに引き渡す場面です。その時ユダは、「先生、こんばんは」(26:49)と言ってイエスさまに接吻し、裏切りました。この「こんばんは」が「カイロー」です。もう一つは、ピラトの兵士たちがイエスさまを王に見立てて、「ユダヤ人の王、万歳」(27:29)と言って侮辱する場面です。この「万歳」も「カイロー」です。

ユダは日常の言葉でイエスさまを裏切りました。兵士たちも日常の言葉でイエスさまをあざけり、侮辱しました。でも、それは、ユダや兵士たちだけに限ったことではありません。私たちもまた、普段の生活の中で、ごく日常的にイエスさまを裏切り、侮辱し、イエスさまを悲しませてしまっているのかもしれない。

しかし、そんな私たちのためにイエスさまは、祈られ、十字架に架かり、復活されて私たちに会ってくださる。朝毎に「おはよう」と、赦しの喜びと愛に満ちた言葉をかけてくださる。イエスさまは、私たちの裏切りの言葉であった「カイロー」を、また侮辱の言葉であった「カイロー」を、喜びの言葉の「カイロー」へと変えてくださいました。そして、私たちが、裏切っても裏切っても、尚もイエスさまは「おはよう」と、爽やかな御声と笑顔で、私たちを迎えてくださるのです。

主イエス・キリストの愛は、何も特別な時に、特別な機会にのみ与えられるようなものではありません。私たちの日常の中で、何気ない仕方で私たちに注がれているのです。今日、この朝も、私たちに注がれているイエスさまの「おはよう」に、私たちも「おはようございます」と応えていきたいと願います。